

---

# テクスチャ in the メルクマール

蟻塚つかっちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テクスチャ in the メルクマール

### 【Nコード】

N2143V

### 【作者名】

蟻塚つかちゃん

### 【あらすじ】

僕と君 五十嵐坂祈りの世界の中心で愛を叫んだ獣。

僕は輪廻する。(前書き)

生きとし生ける物を泥水に浸したらおいしくかもね。

僕は輪廻する。

僕は歩く。

僕は歩き続ける。

5000匹の宇宙を連れて。

個々のビッグバンはエネルギー過多である。

だが、その色彩はスペクトルを超え、只の共感覚<sup>シナスタジア</sup>へ至る。

僕は歩く。どこに向かっているんだろう？

わからない。まるで思春期<sup>イカサマのきせつ</sup>のころみたいだ。

道路　花道<sup>ボトムアップトップダウン</sup>か餓鬼道かはわからない。けど僕は歩く。

僕は肩から腰へ一つの四次元カバンを提げている。

黄色くて球形のソレ。

その中には21世紀に流行した脳溢血<sup>のういつけつ</sup>のアイコンが入っている。

毒蛾の鱗粉のようなコンピュータアプリ。

「そんな旧式捨てなさい」と恋人は言うけれど、

このファイルは僕の宝なのだ。恋人　君のいうことなんて聞くも

んか。

空気中から汲み取られた炭素は珪素<sup>けいそ</sup>生物となつて、

このソフトを動かすのだ。僕はこれが好きなんだ。

僕は歩く。

僕は歩き続ける。

グラッ、

ドボン。

道中にあつた次元の掬<sup>ねじ</sup>れに躓いてしまった。

僕の身体は大きくよろけ、

その隘路<sup>あいろう</sup>の側溝<sup>そくこう</sup>に足をインサートしてしまう。

「いけね」

ひとりごちてしまった。あまりにもひどい様だ。

笑える。けど笑えない。

機械仕掛けのヘドロからなかなか抜け出せない。

膝まで「喰われた」僕は一所懸命もがくのだけれど、  
スケルツォ諧謔曲のような粘着性の水は僕を離さない。

シユールな状態を右目のモノクルで眺める。

シユシユツ、シユシユツ。

何かいるようだ　そこには

テトラ生命体がいた。テトラポッドに似た形状。

大きな口を開けている。鋭い牙が生えている。

僕は食べられるのだろうか。

と思うや否や、

ガブリ、ムシャムシャ、

僕は食べられたのだった。

.....。

.....。

僕は起床した。覚醒した

夢だった。

今までの経験は夢幻<sup>むげん</sup>だったのだ。

けれど嫌悪感<sup>ふぶんりつ</sup>はなかった。特殊な飢餓<sup>あいぞうげき</sup>のよう。

ナイトメア

悪夢ではなく、なかなか充実していた夢だった。

お。

ここは僕と君の家。それは僕が一番わかっている。

和室のリビング。エロクロナンセンスたぶん昭和前期から変わらない風景。

時計を見ると、午後三時。どこかのおまつり柔らかい日光でまどろんでいたんだ。

うーん、気持ち悪い。よだれかな？ 顔に何かついてるや。

まずは、顔を洗おう。

廊下をわたって、僕は洗面台にくる。

カラン蛇口をひねる。水<sup>いっしゅんだけのこうぶく</sup>が出た。タライに入れて、

水を顔に当て、口を動かす。

爽快感が口腔に広がった。

それは日輪か月輪か。

ふふ。

にやける。にやけた。

君の顔を思い出す。これは現実だろうね、きっと。

「……」

でも

デジャヴ。なにかいる。

「あ」

水の中に蠍がいた。

死霊のようなその姿。

針が裁縫針ではなくマチ針だった。

ジャボン。ドン。ピキン。

僕はそいつに刺される。

不思議と痛みはない。毒気が僕を巡る。

まるで惑星の地熱のように、

マグマの蠢動のように。

それは僕の血液を媒体として、

空々漠々とビタミンを壊疽していく。

……。

………。

僕は歩く。

僕は歩き続ける。

僕は心臓へ向かい、大動脈へ向かい……。

蠍に刺された僕の中で、

僕は歩く。

歩き続ける。

僕の中で僕がいる。

そうか、ここは夢でありながら、僕の体の中なんだ。

メビウスの輪、クラインの壺。多次元宇宙。

ふゝん。なるほどね。

そのエピゴーネンを内包しながら僕は歩き続ける。  
歩く。ただ歩く。明晰夢めいせいむと知りながら、僕は歩く。僕の体内を。

あれ、やっぱり夢だなあ。

再確認した。確乎かつこたる保証がある。

さっき認知した君の 恋人の顔を忘れている。

そう、夢だから。これは夢だから。

君、五十嵐坂祈りの顔を忘れたんだ。  
いがらしさかいのり

だって、

ねえ、

現実じゃそんなことはないんだから。

絶対忘れはしない。

僕たちは恋人だわかれることのないふたりから。

僕は君を愛しているんだから。

好きなんだから。

風が孵化する。(前書き)

油膜めいた君の皮膚をいつ破ろうか？



## 風が孵化する。

上位構築めいた夢から覚める。  
よつと。

横臥していた僕は重たい腰をあげた。

ぴゅー。ひゆるりり。

薫風がひとつ吹いた。

ちりーん。

風鈴もなる。庇護された朗らかな音。

「ふう、風が気持ちいい。まるでセックスのよう」

僕の横にいる君が呟いた。「おもしろい例えだね」

僕はその畸形な身体を覗きながら、

沈澱していくシンボルを心の奥で感じた。

リトマス試験紙のような彼女の足首を、

僕は両手で壊してしまうように強く握る。

「ふう」これで目が覚めるだろう。

彼女は啞然としているが別に嫌っているわけではなさそうだ。

「どう？ 気持ちいい？」

「……うん」

「さっきの風とどっちがいい？」

「……これ」

彼女は林檎のように真っ赤になった。

こんな日には散歩するにかぎる。

壁に囲繞されている1号公園にやってきた。

相変わらず恋人 君は来ない。

彼女はめったに部屋からでない。なんでだろう？ たぶんあの外見

に関係あるんだと思う。

とか言っててこの次の話とかその次の話とかで家の外部に出るんだ

けど、そんなメタな話はいらないか。彼女は「……」無言で僕を見送った。たぶん行かないでよかったんだと思う。でも、今生こんじょうの別れじゃあるまいし、百鬼夜行シユブナイル小説でもない。ただ数分間さ。このお話でも君の出番はあまりないんだ。ごめん。

おっと、メタがすぎたかな。

閑話休題やいひやすめいはなしはすてぢまへ

いつも君と一緒にいる。それは恋人同士だから。

でもたまには一人になりたいときがあるものさ。人間だもの。

だから僕はこの孤独趣味を純粹に楽しめそうだ。

これは君への刃こぼれした優しさなんだろうね。

君も一人でテトリスでもしといてよ。

流星群がブランコに宿る。

プラネタリウムの美しさが目に浮かぶ。

公園は夜だった。歪んだ日夜はおもしろい。家を出たのが確か……

夕方たふらの5時だったはず。

てくてく。てくてく。

目の前にシャケ色の人物が歩いてきた。

てくてく。てくてく。

僕はスルーしようとした。けれど

「あの〜」

僕に用があるのだろうか？ 声が掛かった。

それは湾曲した流体細胞の塊だった。

彼は鹿爪らしい様子でこう言った。

「僕の顔を描いてくれませんか」

「うん？」一瞬意味がわからなかったけど、

よく見るとその塊は顔がなかった。のっぺらぼう。

「じゃあ、僕がレイアウトしてあげる」

お気に入りの四次元カバンから蛍光ペンを出して、

その顔に嘘ほたてつのかおを描いた。

「ありがとう」彼は満足したのか帰って行った。  
ダミーの顔でもいいんだろう。

自己同一性を求めていたんだろうな、と僕は思った。

そうさ、人生は人生ゲームのようなモノ。一步步けば竜巻で振り出しに戻る。彼はそれが怖かったのだろう。

「ふう」溜息ひとつ。

そろそろ帰ろうかな。

結局、一人にはなれはしなかった。でも、なんだか、心地よかった。ててて。とととと。

僕は歩いて帰る。

一步步踏み出して、

それはまるで自首するかのように、  
散文詩のように、

綺麗な音韻を踏んで、僕は歩く。

「やっぱり風が気持ちいい」

声がする。君の、五十嵐坂祈りいがらしがいのの耽美な美声。

おや、そういうことだったのか。

僕は理解した。そしてカバンの間隙かんげきから

四次元カバンのなかにはひとつのモニター、が見えた。

「君、いたんだね」

「そうよ、ずっといたわよ。物語の最初から、ね」

「まるで、」

「うん、人生ゲームのように、ね」

ふふ。キメラ化した電波に接続した恋人は笑う。

その笑顔がなんとも……いえない。好きだなあ。

「ね」

「ね」

チューブをチューニングしたばかりだから、

音が清冽だ。君の声が春雷のように聞こえる。気持ちさっぱりだ。  
耳朵を舐めるよう。

「ねえ」

「なーに」

「この風は君にどんな祝福を与えるんだろう？」

「私は風を感じられないわよ。このモニター越しの世界じゃあ」

「そうか……」

「でも、きつと」

君は言う。

「私たちへのご都合主義ラフソングでも歌ってくれているんじゃないかしら  
ふふ。僕は笑う。そうだね。「僕もそう思うよ」

「うんっ。私家で待っているわ。君が帰ってくるのを」

「うん。じゃあね」「じゃあ、ね」

通信は切れた。交差点の信号のように。すぐ。

そうだ。

いいことを思いついた。

この風を持って帰ろうと思う。君のために。

僕は君を愛しているんだから。

カバンをこそこそ、

お。これこれ。

僕はカメラを取り出して、

カシャリ。

風を記録した。写真に収めることに成功した。

これで土産ができた。君への幾何学模様プレゼント。愛のプレゼント。

うん。

僕は歩く。僕と君の家に向かって。

考える。にこにこしながら僕は考える。

現像しないとわからないけど、きつと、この風は透き通っているんだらう。

まるで君の白い皮膚みたいに。  
と。

墓が収斂する。(前書き)

幻影のギロチンに首を捧げませんか。

## 墓が収斂する。

久しぶりに母親の墓参りにいこう。

僕は思潮を敷衍しながら双眸を開いた。

「そう。じゃあ、私も行くわ」

「本当かい？　きっと母も喜ぶよ」

「うんっ」

君　恋人は僕の母と仲良かったからついてくることになった。

「じゃあ、待ち合わせしよう」

「そうだね」

一緒の家に住んでいるのに別々に行くっておかしいと思う人もいるかもしれない。でも僕たちはそうやって過ごしてきた。まるでそれがデフォルトであるように　狂言綺語のように。

楽しみだ。

君とのデート。なんて、嬉しいんだろうか。たぶん君は外にあまり出ないから、ね、それが僕の鬱憤の不満だったんだ。でも君も確かに人間で僕の恋人。そりゃあ外出するときもあるさ。女の子だもん。

僕は五分前に待ち合わせ場所の戦場<sup>いくさば</sup>にきた。

荒れた城塞。城壁。障壁。がしゃどくろも笑っているや。

やっぱり戦場<sup>いくさば</sup>、紅く濁っているね。

「君はまだかなあ」僕は小さな声で囁く。

まるで運命をもかくように。

その二秒後、

有象無象を巻き込んで、

磊落<sup>らいらく</sup>な君がやってきた。

ピンクのワンピースが、

君の美貌を強調している。

あたかも桜花<sup>はかなきのしゅんげし</sup>のように。

「相変わらずコケットリーだね」  
「あなたこういうの好きでしょ」  
君の三つ目の目がウインクした。  
四つ目の目は瞑<sup>つぶ</sup>っていたけど。  
さんさんさん。

太陽が高かった。まだ二時くらいだろうか。

その墓は山の一番上にあつた。

僕たちは上る。

心情を掩蔽<sup>えんぺい</sup>しながら、

脱水症状にコネクトしながら。

空中分解する飛行モータービル。

厭世的な入道雲。

墮胎する処女懐胎。

いろんな対象を見ながら、

僕たちは上る。

「ふう」息を吐いた。

「疲れちゃったの？」君は笑う。

「少し、ね」

「じゃあ」といって君は唇を突き出す。

「うん」僕は自分の唇をそれに接着させる。

唾液を通して1GB<sup>ギガバイト</sup>の情報を交互処理する。

恋人のエピステーマーは聖女の憎悪のようだった。

政治の矛盾点を内包する琥珀色の上位構築。

「いつも通りの冠詞だね」

「うん。theの虚栄がわかるでしょ」

接吻<sup>キス</sup>は終わり、再び歩き続ける。

せいなるはかは  
埜域に到着した。

僕たちは墓前で祈った。

世界が終わりますように。

世界が始まりますように。

その時、僕の致命的な傷が痛む。

「あんだ、きたんだね」

逝った母親の様子がインストールされ、母の言葉が紡がれる。

「楽しくやつてるよ。あんたは幸せかい」

と声がかかる。まさしく母だ。

「うん」

数分間、母と会話をした。久しぶりだったけど、なにかも変わって  
いなかった。死んでいるからそうなのかもしれない。話によれば、  
破門された僕の母は、自分だけの天国で娼婦きらいなおしごとをしているらしい。

「客はいないけど、儲かっているんだよ」

「そうなんだ」僕は唱えた。

まあ、幸せならいいけどね。

母はいつのまにか消滅していた。喪失感は無かった。  
ひょひょひ  
飄々した君が言う。

「じゃあ、帰ろうか私たちの家に」

「うん」

いつの間にか日が落ちている。

鮭色に日華が奏でている。

嘘八百。

天地創造。

神の脳髓。

…… 帰りも多種多様な幾何学を見た。

「僕も死んだら、ここに埋葬されるのかな」

僕はここぞとばかり訊いた。

それに対して冷笑的に君は言う。

「そうよ。きつとそうよ」

「死ぬってどんな感じかな」



「アヘンのようで、仮想化された図書館に近いわね」  
「ふーん」

僕は君 いがらしざかいの 五十嵐坂祈りの肩を抱いた。ゼロ距離になるまで近づいた。いわゆる融合ってやつだ。君の精神と僕の精神が触れ合う。二がーになる。いうまでもないが、この現象は数分間だけさ。けど、たぶん忘れはしない。何回も結合したけど、心地よい。気持ちよい。セックスとは違った快楽。だって肉体じゃなくて精神、心だ。それが びまん 瀰漫する。剃刀のようでありながら、 スパッとせかいをきるもの 蜜蜂に似た世界観だ。やっぱり、いいね。

そのまま僕たちは落日を背に坂を下った。真っ赤な円が僕たちを祝 れい 福 ぞく していた。  
僕たちは気持ちよかった。

雨は酩酊する。(前書き)

誤認した歌姫の突発的な演技はよかった。

## 雨は酩酊する。

5月葡萄酒日、ポルドーワイン 天気雨。風は猛々たるものなり。

じめじめする。

きこくしゅうしゅう

鬼哭啾啾の庭。

けんきようふかい

牽強付会な花束。

「うーん、気持ち悪いなあ」

僕はこんな青白い雨が降る日が苦手だ。

電波も膨大な量が卑金属に降り注ぐのだ。

こまじゅう

混淆した平仄が食卓に出る。

これがまたびっくりするほどまずいのだ。

トコトコ、トトト、

「なーに更けているの」君がしゃべる。

いかん

埋没した精神では如何せん悲しい。

けれど華奢な君がいてくれれば元氣百倍さ。

しつこいけれど、僕は君のことが好きなんだ。

すべてを愛しているんだよ。

「今日は外出しないよ」

「あら、今日は家に閉じこもるの？」

「うん。雨が降っているからね。まるで黒魔術ヒンクフロイドのような雨だもの。

呪われそうさ」

「そうかしら……」

「でも これで君と一緒にいられるね」

「ばか」

君の頬が赤く染まる。

かわいい奴め。

僕は即物的にその脱け殻を食べる。君の感情の脱け殻。故郷の味がする。母の味だ。先日詣でた墓参りが思い出される。ゾンビーとレ

クイェムを昏倒で炒めたような味。デストルドー瘴氣しょうきに包まれた酸素せいぶつをいかすじぶつの中で、食べるこの味がおいしいんだよなあ。

「ねえトランプでもしない？」

君のリポジトリが瀾漫びまんする。

十三次元の笑窪がかわいい。まあ、どの部分でも霧のように白くて綺麗なんだけど。

「暇だし、しようか」

「うん！」

なんて幸福そうな笑顔なんだ！

ますます君を好きになってしまっじゃないか。

僕がカードを混ぜる。そして一枚ずつ配る。手札は7枚。

おや、なんてことだ。

手札が全てジョーカーだけだ。

こんなこと初めてだぞ？

でもいかさまにしてはあまりにも端正わんていすぎる。

でも、僕がカードを繰んだから、君の罨くろではないようだ。  
ランダムサンプリング  
無作為抽出における5%の算術誤差とらわれのみかもな。

僕がこの矛盾を言う前に、

「私から出すわよ」

と君は柔らかな鼻の線をきらめかせて一枚の「尖塔」を提出した。それは炎帝の司る新橋色のカードだった。

僕はそれに対して「逆航した」ジョーカーを出す。

「ふふ」彼女は余裕の笑みを浮かべる。

結果はわかっていて。というかこの手札の時点で……ねえ。

「負けたよ、僕の負けだ」

そりゃあ、そうよね、と言って手札のカードを見せる。

「修道士」「アンニユイ」「解剖」「鎧袖一触」

みんな強いカードばかりじゃないか。

「ふふ」君は笑む。

神から庇護されたこの家は、そんな颶風くふうには負けない。  
だって君と僕の家だもの。そんな暴力じみた暴力でこの愛の城は崩れないさ。

僕たちはトランプを止め、陽炎が昇る部屋で、  
ポチッ、と

テレヴィを付けた。

その映像では、檻褸ボロを着る落伍者が自然に擬態していた。  
「趣味じゃないわ」

「うゝん」

コロコロとチャンネルを変える。

でも、僕は、「興味深い番組はないな」といってリモコンの赤いボタンを押す。

ぷつん。

テレヴィは完全に沈黙した。

「何しようか？」

君は言う。僕の胸は妖しく鼓動した。

「……」あえて返事をしない。君への　　を　　するためだ。

そして、僕はいつもの蛍光ペンを取り出す。脳に直接、詩歌を書く。

「産業廃棄物は君への恋文……うゝん」

「詩を書いているの？　いい詩じゃないいい詩のめれじ」

「それほどでもないよ」

謙遜する。赤ら顔で　君に褒められるなんてそれほどないからね。

「贗物がんぶつの城は君を包む……ってどうかな？」

君が提案する。いいじゃないか。

「おどろおどろしいキップルは喋喋喃喃ささやかめもも」続けて君は言う。

「砂糖菓子ボルノえいがはガラス細工」僕は負けない。

「面会謝絶は機械仕掛けノ「キリのごとく」

「タイムマシンはただ爆ぜた。運命を殺すように」  
ふう。

「……いい詩だね。これもアップロードするの？」  
君は首をかしげて訊いた。

僕はいつもあるサイトに詩を投稿している。「無題詩」という名でそれは昏き土壌のように単なるアウトサイダーなのかもしれない。  
かじょうほううまい  
自慰行為かもしれない。けれど、僕は 投稿し続けるだろう。

君の次に大切な趣味そんげんしのほうほうなんだから。

「うん。これは僕だけのアルバムに挟むんだよ」  
僕はやさしい嘘を吐いた。

「そうなの？ いい詩なんだけどなあ」  
ごめんよ。その日になったらわかるよ。君にあげるんだから。楽しみにしてくれないか。

僕の意図に反して いや、賢い君はわかっていたんだと思う。  
君は偽善しったかぶりじゃなくて本当に賢い。僕は到底及ばないな。

「もうすぐで私の誕生日よ。何くれるのかしら」  
と、彼女は僕に聞かせるように呟いた。

僕のもくろみはとづくに理解できていたんだろうな。

「楽しみにしといてよ。きっと喜ぶものさ」  
「うん！」

君へこの詩を捧げる。……これが君へのプレゼント、だなんて今言えないな。君はわかっていているだろうけど。

君はわら束のようにしんみりした。

「私もあなたが好きだもの。信用しているわ」

……僕の顔がアプリコットのような色に変わるのが実感できた。

相変わらず、雨はピチャピチャと降り続けている。  
けれど、僕はそれを黒魔術ではなく、  
そう白魔術うぐえんのトークンのように認識していた。

どうしてだつて？

言わなくなつてわかるでしょ？

君 いがらしざかいの 五十嵐坂祈りのおかげさ。

僕の大切な恋人。うん。僕は君を愛し続ける。  
君は言う。

「ねえ」「うん」

わかつているさ。ね。

そのあと、僕は君と雨を楽しんだ。

妹が蔓延する。(前書き)

異端の神は偽善の末裔を食べる。



## 妹が蔓延する。

実家から26人の妹がやってきた。

「うつすー兄貴」「おはようございますお兄様」「にいにい、久しぶり」

数々と声を掛ける妹達の何人かは墮落していた。ドロリと溶けたその身体から産業廃棄物が漏れ出ている。放射能を含んではないから、人体には影響はない。

きっと戒律に違反したのだろうか。

もしくは贖罪に失敗したのだろうか。

どちらにしても厭世的な生き方をしていたに違いない。僕もいつ、そうなるかわからない。その現象は無作為抽出だから仕方ない。来世で頑張ってくれスライム妹よ。

溶解している彼女らの美声の残骸が次第に固体化する。それはだんだん……空気中の水分を含む。ゲル状の物体は縹色と驟雨が混在していて、何か切ない。部屋の湿度が急に上がる。

じめじめ。

じめじめ。

恋人はゲルになった彼女の声を拾って鍋の中に入れている。

「これがおいしいんだよ」

確かにね。

僕たち28人は鍋の周りに座る。

「はい、5番の妹さん」と恋人は皿を渡す。

「ありがとん。空も飛べそうです」

その白亜の食器を受け取ると妹は「自殺の悲しさ」を大匙5杯入れる。

「味付けは、世界を征服するんだ」と声を出す。

ふふ。相変わらずだなあ。

まあ、僕には理解はできないけどね。

そのとき「あたし我慢できないよう」と言って何番目かわからない妹が、

沸騰してる鍋の中に入ろうとする。

「……」一同騒然と……ならなかった。

静かになった。誰もがこのことが当然であるかのように。

けれど、沈黙はすぐに壊れた。

足を鍋の淵に掛けた。

ガッ。ヒュルリ。ドドドドトトトテテテテキューーーーン。

するとその綺麗な足首がするり、と吸い込まれた。

妹がブラックホールのように吸われるようになってしまった。

その場から一人妹が消滅した。

無となった妹の姿は、それはそれは胡乱としていて大瀑布のようだ。

「あらあ」と恋人はうつろに笑う。ははははは、と笑った。妹25人も笑う。

でも僕は笑えなかった。なぜか胃の腑のあたりがぞわりとした。それは先ほど食べたキリストの肉が胃液で溶けたからかもしれない。うみがめのすーぶ

1時間後。

机の上を見ると真っ白な食器には何も乗っていない。25人の妹は、鍋を食べ切ったのだった。

僕は訊く。「25人の妹たち、どうだったお味は？ お口に合った？」

妹は答える。「うんっ！」

それはよかった。

「でもさ、」11番目の妹が首をかしげて質問する。

「この鍋の材料って何だったの？ やけにおいしかったけど」

僕はのんびりと頷く。「秘密さ」

「えっ！」

「この鍋に何が入ってたのお兄ちゃん!」「……中身は……?」「材料はなんなのよ、兄さま」

はははは。僕は笑う。「普通のモンさ」

「花飾りと蟻地獄、そして天使の唾液が入っていたのよ」  
君が得たり顔で妹たちに説明した。

「あとはね、リングだね」

妹の何人かはいつのまにかメモを取っているようだ。

「……そんなところよ」君は満足そうな顔をしている。僕は鍋の材料はこの家だけの完全秘密にしたかったけど、君がそんなに嬉しうに言うんだもの。止められないさ。うん。笑顔は僕が困るほど綺麗だ。

25人の妹たちは君を見つめた。そして口ぐちに言う。

「さすがですお義姉さん」「すごいです姉じゃ」「美しいですものね、姉さん」「早く結婚したらいいのに、ね」「うん」「そうです」「私もねえねえのような人になりたいな」「うん」「うん」

君の顔が夕焼けのように真っ赤になった。

いつものクールビューティはどこか遠い所に出張したかのようにどこにもいない。動きもぎこちない。恥ずかしそうに言った。

「ば、ばかつ、そんなつもりで言ったわけじゃないんだからね。て、てか、私は、まだあなたの『お姉さん』じゃないんだから。私達はただの恋人よ。結婚はまだしてないわ。ね、そ、そうでしょっ?」

「……」僕はにんまりと君の顔を眺める。

「! もう、ば、ばかばかばかばか」

君はばかばかと僕の胸を叩いてきた。痛みはない。甘噛みのようなものだろう。

僕は、そのまま、君を、抱きしめた。

君は驚く。でもそれを肯定したようだ。君も抱きしめてくれた。静かに僕は言った。

「君が、好きだ」

「……私も、よ」

抱擁は終わり、君と対峙する。

見つめあう。視線と視線がぶつかる。

エーテル麻酔のような沈黙が数秒続く。

僕は決めていた。

うん、

言おう。

「……僕と、結婚してくれ」

「あ！」

君の身体がブルブルと震えている。激しい心臓の音ねの聞こえる。僕の一世一代の告白に動揺しているようだ。口を動かしているがそれは声にはならない。まだ眠るお月さまを想像できるほどの君は、あわてている。

君は目をつぶって深呼吸した。ふうーはあー。ふうーはあー。落ちて着こうとしているのがまじまじと伝わる。

静かに目を開けた。

そして、君はたぶん僕が君と出会ってから一番の幸せな顔をして、口を開いた。

「……はい、こちらこそ、お願いします」

拍手喝采が聞こえ、僕たちは長い長い口づけをした。

「おめでとうございます」「……よかったです」「おめでとー」

「ありがとう」僕は妹に感謝した。

「今度会うときは30人になっているんだろう?」

「そりや当然です」と妹と最後の会話をして、

妹達は「じゃあ帰ります」といって僕の、いや僕たちの城から出て行った。

そのとき馥郁たる香水の匂いが香った。ネクロフィリアのアロマのよう。

「忘れていました」1番目の妹が帰ってきて「これはお土産です」と言って四角い箱をくれた。棺のようだった。本当の帰り際に一番目の妹は言った。「お幸せに」

「結局、妹っていうのは理想郷のトークンだったんだね」君は小さく言う。

「そうだね。ただの漆黒の煤煙なんだよな。手で掴めない」  
広い広い家には僕と君しかない。

数時間前との関係より進展した君が言う。

「あなたの妹さんまるで自殺きんぞくばつと幫助みたいね」

「あ、よく気づいたね」

「だって、生命保険あくまのけいやくの増塙が透視できたもの」

「そう」

僕たちは短いキスをして、

遠くから流れる弔鐘を聞いた。

誰か夭逝したようだ。

僕は思う。

この重低音は君の唇の恣意的な鳴動に似ている。

静謐な君との口付けが終わる。もつとしたかった。

「そうだ」お土産はなんだろう。心臓にも似た箱を開いた。  
髑髏どくろが入っていた。

また、変なものを買ってきて……。

君は言う。「けっこつ、おもしろいじゃない」

よく見ると、そのシャレコウベはけらけら嘲笑していた。

何かのパロディだろうか。自衛隊かな？

すっかり広くなった僕の部屋で、

「じゃあ、巡礼でも行かない？」

と彼女が声を掛けた。

そうだな。讃美歌も聞きたいし。

「じゃあ、行くか」

粗悪品のような鈍く嘎れた声を出す。

鮮血に汚れた僕の超自我を洗濯しよう。

そして君への恋心を鋭敏化しないとね。

きつと君は朧月夜に映えるんだろう？

僕はわくわくした。血管が蠕動運動を始めた。

君 いがらしぎかいの 五十嵐坂祈りは、今日、僕のお嫁さんになった。  
うん！

僕たちは教会へ出かける準備をした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2143v/>

---

テクスチャ in the メルクマール

2011年10月10日03時28分発行